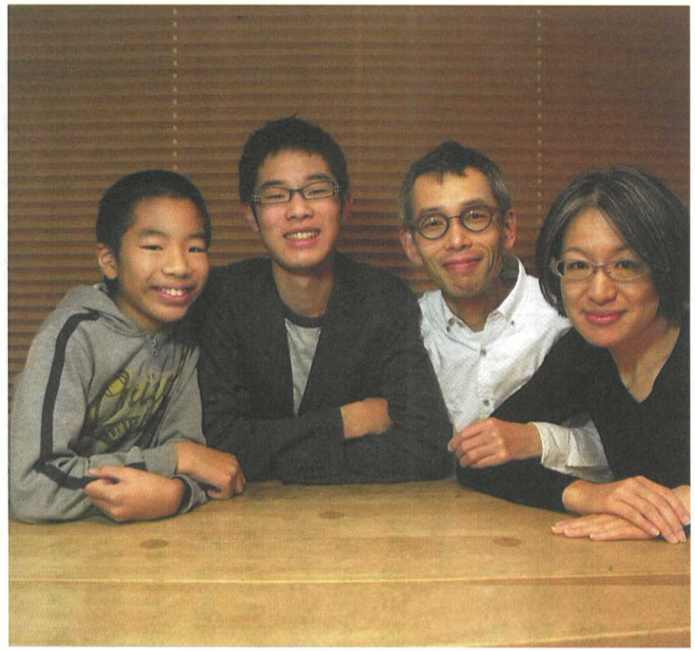
私の救いの神にあって喜ぼう

鍋島　直子



右から直子さん、夫の悟さん、長男の広海さん、次男の晶さん

小学校一年生の三学期がもうすぐ終わるころ、父が枕元にやってきて「二年生からは尾鷲（おわせ）のおじいちゃん・おばあちゃんの家で暮らすんだよ。これからお母さんはずっと入院になるけど、おりこうにしていたら、お母さんは病気が治って退院してくるから」と言いました。

母が「おなかの病気」で通院していること、何度も入退院を繰り返していることは承知でしたが、祖父母宅に預けられるのは切り離されてしまうような気がして絶対に嫌で、不安が一気に押し寄せてきました。

「いやや。いやや。絶対に行きたくない。転校するのもいやや」と、父の前で泣きましたが、泣いても行くしかないのだ、とわかっていました。

小学校二年生からは祖父母宅から学校に通いました。泣いて嫌だと拒否していたけれど、尾鷲に住み始めてから私は外で友達と遊べる子になりました。尾鷲は空が広く、海と山が近く、同級生が近所に大勢住んでいました。なによりも尾鷲に住み始めてからは苦手なお留守番をしなくてもよかったのです。両親の元にいたころはお留守番をしなくてはいけないことがよくありました。誰もいない家に帰るのが嫌でした。物事に集中できず、何をしても不器用で不安で、外に出て遊びたいとは思えませんでしたが、転校してからは放課後に毎日外で遊びました。

新生活に慣れたと思ったのも束の間、六月の下旬、西日のあたる校庭で遊んでいたときに「久居（ひさい）の家に帰るから」と姉が迎えに来てくれました。両親の家に帰れると思うとうれしくて、喜び勇んで帰ったのに、出迎えてくれたのは父だけで、家の中の様子はとても変でした。黒い服を着た人がたくさんいて、近所のおばさんたちは私達を見ては泣いていました。こんなにたくさんの人がいるのに母の姿がありませんでした。まさかと思いつつ、父に「お母さんは死んだん?」と訊ねると、父は「うん」と頷きました。文字通り、断崖絶壁から突き落とされたような感覚、考える間もなく泣き出した私を父は抱き上げてくれました。もう、大きいのだから人前で抱っこなんかして欲しくない、という気持ちと、おりこうにしていたらお母さんは帰って来るって言っていたのに、という気持ちでした。

母は享年三十七歳、S状結腸癌でした。姉は五年生、妹は四歳でした。

母の葬儀後、私は学校に行かなくなりました。風疹を患い、出席停止になったことがきっかけでしたが、その期間が過ぎても私は登校しませんでした。父が柴犬の子犬を連れてきてくれたので、毎日、犬と遊ぶか本を読んで過ごしていましたが、日曜日には祖母である大江美恵子姉が教会に連れていってくれました。日曜学校で初めて聖書を手にとって読みました。旧約聖書は難しそうな感じでしたが、福音書は好き

でよく読みました。

心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。（マタイ　5・3～4）

「なんで貧しいことがええんやろ?」と感じたことを覚えています。日曜学校に同じ小学校の子はいなかったので気楽でした。「ふくいんのきしゃ」の歌もこのころに初めて歌いました。あるときから祖父が計算や教科書の音読、漢字の書き取りを一緒にやろうと言ってくれました。祖父と一緒に勉強しながら規則正しい生活を繰り返すなかで、私はまた学校に行けるようになっていきました。

三年生になると、一つ前の席に座っていた男の子が後ろをむいて、「本当にお母さん死んでるの?お母さんが死ぬってどんな感じ?」と聞いてきたので、ちゃんと説明しようと思ったのに涙が出てしまいました。学校で泣くのはかっこ悪いと思ったのに、それでも泣いてしまった私を担任の先生は別室に呼んでくださいました。

「君は早くにお母さんを亡くした。これから先、辛いことや悲しいことがあるかもしれないけれど、しっかり生きていきなさい。ちゃんと生きていきなさい」とおっしゃいました。いつも笑わせてくれる面白い先生が、目の高さを合わせて真剣に話してくださったときは居心地悪く感じたものの、先生は今、私の行末を心配して、子ども扱いせず、大切なことをおっしゃってくださっているということはわかりました。

その後、父は再婚し、私は五年生からは元の小学校に戻り、高校を卒業し、進学し、三重県で教員として就職しました。母を早くに亡くしたことで「苦労されましたね」と声をかけて頂いたことがありますが、私自身はこれといった苦労もなく好きなことをして成長し、今では産んでくれた母の年齢を超えました。父と母はとても真面目に働きながら私たちを育ててくれて、私は多くの経験を通して様々な感情を味わいました。かつてお留守番をしながら感じていた不安や自信の無さが嫌で、目標を設定してこなしていくことが自分の居場所を確保することであり、私はしっかりと、ちゃんと生きていると考えていました。

実家から遠い県立高校に赴任することが決まり、一人暮らしを始めたときに伯母の山田公代姉が名古屋キリスト集会に誘ってくれました。とても気持ちよく過ごせるという印象でした。教会に通ったのは小学校の三年間だけでしたので、名古屋集会で聖書を借りて開いたとき、懐かしく感じ、みことばは新鮮でした。

女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。（イザヤ　49・15）

こうして名古屋集会に集うようになりましたが、イエス様が十字架に架られたこと、イエス様が三日目によみがえられたことが自分に直接関係があるとは考えていませんでした。

一九九九年三月に悟兄と結婚に導かれたときはイエス様に感謝しましたが、結婚後間もなく私はうつ状態に陥りました。

突然、生きていくことは苦しいという思いがどんどん広がり、ほどなくしてパニック症状も出始めました。毎日死ぬことばかり考えていました。結婚を機に中学校に転勤していましたが、出勤することが困難になり、主人に内緒で遅刻、早退、欠勤を繰り返していましたが、ついに行けなくなりました。どこにも行き

たくない、誰にも会いたくない、電話が鳴るのは恐怖でした。他人と話すと後でパニックが起こるので、上司との面談は主人が代理でした。病休を取るにも診断書が必要で心療内科を受診し、医師やカウンセラーの方々は誠意ある態度で接してくださいましたが、受診後は疲労困憊して帰宅しました。成育歴や職場環境に原因があるのではないかと言われましたが、とにかく早く楽になりたいと言うと、医師は症状の緩和が期待できる薬を勧めてくださいました。楽になれるなら毒でも飲みたいほどでしたが、妊娠が分かったので薬の服用は見送りました。人の心を本当に救えるのは人ではなく、いのちは神が司っていることを感じ、苦しいけれどもう少し生きてみようと思いました。

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

（ローマ　6・23）

育児の間も、うつとパニック症状はあり、パニック中の私は手の付けられない獣のようでした。片道二時間通勤をしている主人の気持ちも察せず、息子の成長を楽しむこともできず、このような状態はすべて自分以外のありとあらゆるもののせいだ、という被害者意識しかありませんでした。パニックの時、部屋の隅で私を見て怯（おび）え泣いている息子に気づき、言葉にならない虚脱感のようなものを感じました。近所の小さい子たちが外で遊ぶ歓声が聞こえるのに、私は締め切って、こんな状況に息子を置いている。恐ろしいまでの劣等感と絶望、孤独、辛くて悲しくて不安の淵にいるようでした。ちゃんと生きたいのに、生きるのはもう無理だと思ったときに「イエス様が本当にいるなら助けてよ」と、つぶやきました。主を見上げ、心から助け出されたいと願ったのですが、私

の態度はイエス様が十字架に架られたときに隣で口悪く罵（ののし）っている強盗と同じでした。礼拝やバイブルキャンプや家庭集会に集い、「主よ主よ」と言いながらイエス様を無視し続けていたのでした。へりくだれず、群れの中にあっても自分の尺度で振る舞い、表面をきれいに飾っているつもりで、イエス様に石を投げ、罵る者でした。

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。　（イザヤ　53・4、12）

自分は空（から）っぽであると思い知らされ、何もできず、死にたいと思う気力もなく、締め切った家に閉じこもっていたときに、「私がこんなふうだからイエス様はいのちをくれたのかも」と思いました。こうして、イエス様が十字架に架けられたのは私の罪のせいだ、三日目によみがえられたのは私にいのちをくださるためだった、と受け取ることができ、私の罪は赦されているだけではなく、私は愛されていることを知りました。自分がいいと思って積み重ねてきた経験や努力では、むしろ自分も周囲もおとしめてしまいます。自分でちゃんと生きなくても、しっかり生きられなくても、イエス様に生かされていると実感し、みことばは本物だと思いました。私だけじゃない、主人も二人の息子たちも、この地上での歩みの間、イエス様が生かしてくださるから大丈夫だという深い安堵感が嬉しくて、イエス様につながっていたいと感じました。

それで主は、あなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマ

ナを食べさせられた。それは、人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる、ということを、あなたにわからせるためであった。この四十年の間、あなたの着物はすり切れず、あなたの足は、はれなかった。

（申命記　8・3～4）

二〇〇二年に中学校を退職しました。とても無責任な辞め方で職場には大変な迷惑をかけました。眼鏡店に勤務する主人はある大学病院内に新店舗を立ち上げる業務に多忙で、何かにつけて厳しい状況でしたが守られてきました。イエス様は、うつとパニックを繰り返す母親に育てられた子どもたちにも成長していく力を備えてくださっていました。収入減は現実なのに、収入があったときよりも落ち着いた気持ちでした。丸腰でイエス様に信頼するのは少し怖い気もしましたが、不安ではなく平安でした。

もう一度、私たちをあわれみ、私たちの咎を踏みつけて、すべての罪を海の深みに投げ入れてください。

（ミカ　7・19）

日常の様々な場面で主の豊かさを味わい見つめるなかで、罪や愛のなさは生きている限りなくならないと知りました。完全に主に守られているなかで、いかに主に従えない者であるかをあぶり出される日々です。私のすべては主から預かっているに過ぎないのに、高ぶることがやめられず、人を妬（ねた）み、周囲を愛さない罪や無関心、裁く心、その他ありとあらゆる罪は呼吸と同じかそれ以上にあります。感情に支配されて疲れてしまい、反射的に「こういうのはよくないから善処しなくては」と考えるのですが、それでも同じことばかり繰り返すので、自分で善くなろうと努めることは止めました。自分で善くなろうとすると、またかつての不安が広がります。今日はイエス様と交わりを持っていただろうか、と一日の終わりに振り返るとき、私は自分の好きなようにしか生きられないしイエス様のことを忘れてしまう者だけど、イエス様に忘れられていない日々であることに気づかされます。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。（ガラテヤ　2・20）

だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。（マタイ　16・24）

生きていくことは大変ですが、主が共にいてくださることを教えてもらいました。罪は苦しいけれど、いつまでもそこに留まっていなくてもいいと教えてもらいました。イエス様が十字架に架かって、三日後によみがえられたのは遠い国の昔話ではなくて、今の私の日常生活の中にあります。

鍋島　直子（なべしま　なおこ）
一九七三年福島県郡山市生まれ、三重県出身
三重県立桑名西高等学校、名張市立名張中学校に勤務後退職
夫・悟　長男・広海　次男・晶

積み木の順序

竹原　成典



妻の通子さん、詩歩ちゃんと

幼少期、私は、クリスチャンの母に連れられ、地元の教会に通っていました。また、通っていた幼稚園もミッション系でしたので、聖書とイエス様の話にはいつも触れていました。しかし、イエス様とは誰なのか、十字架にかかって死んだということが何を意味するのかはわかっていませんでした。自然の背後にある計り知れない秩序に思いを寄せると、単なる畏敬の念とは違った清々しさを感じることはあっても、主の恵みを感じとることはせず、呼吸するときの空気のように、ただ漫然とその恵みを享受しているだけでした。

大学入学の頃は、聖書の語る信仰について、否定もせず、また積極的に向き合うこともせず、自分の問題として受け止めていない状態でした。「信仰は弱い人には必要なもの」と他人ごとのように思っていたのです。自分のことを、「信仰について理解があり、この世の価値観にも理解を示す、バランスの取れた人間である」などと的外れなことを考えていました。主

を慕うというところからはほど遠く、一方で背くということでもない、中途半端な状態です。

「背く」という行為は、背く相手を意識しているはずです。相手と自分の関係を意識して、反応している状態です。ある意味、反発の中にも、相手とのつながりがあるのではないでしょうか。しかし、当時の私は、主とのつながりに思いを寄せることがありませんでした。主に背くという意識すらなく、自分と主との関係、関わりを感じることをしなかったのです。

わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。　（黙示録　3・15〜16）

そんな折、兄が精神的な疾患を患いました。そのことを通して、両親はそれまで集っていた教会を離れ、キリスト集会に集うようになりました。私は、両親がキリスト集会に集うことについて、「そういう道もまあいいのでは」と思うだけで、積極的に関わりもせず、家族の試練が自分の信仰の問題と結びつくことはありませんでした。

また、その頃、私は、同じ大学に通う当時は未信者の通子姉妹と交際をしていました。ある日、彼女が号泣しながら電話をかけてきました。お父さんが自殺したとの連絡でした。涙ながらに話す彼女を私はどのようにも慰めることができません。私はすぐに、彼女には主の愛が必要だと感じました。彼女を渋谷で行われていた家庭集会に連れて行くと、彼女は変えられ、みるみる元気を取り戻していきました。しかし私は、主の恵み、愛といったものが自分のこととしてぴったりこない、自分の救いの問題に思いが至らない状態が続いていました。まさに信仰の問題は他人ごとでした。

そんな状態にも拘わらず、私は、通子姉妹とともに洗礼を受け、主の前で結婚式を挙げさせていただきました。今では、当時祈ってくださった兄弟姉妹方や、結婚式でご奉仕くださった兄弟姉妹方、ベック兄に大変申し訳なく思っています。

就職と結婚をほぼ同時にスタートした後、私は、その就職先に数年勤務しました。その間に、職場環境が自分の期待していたものとずれていると感じることが多くなり、また、自分の仕事が思うように進まないことで焦りを持つようになりました。そこで、「自分はこのような場所にいるべきではない、もっと活躍する場があるはずだ」と傲慢にも思うようになりました。後先を考えずに退職し、新たに就職活動を始めたのですが、「わずかに積み上げた経歴も、結局自分の希望しない元の業種でしか通用しない」という現実に不安と焦りで押し潰されそうになりました。なんとか再就職できたものの、この時、自分こそ弱く、もろい人間であったと思い知らされました。というよりは、それまでも、うすうす自分の弱さに気付いていたのですが、そのことを認めることから逃げていたのです。いよいよ自分自身と主との関係に目を向ける必要性に迫られたのです。

ペテロは彼を見て、イエスに言った。「主よ。この人はどうですか。」イエスはペテロに言われた。「わたしの来るまで彼が生きながらえるのをわたしが望むとしても、それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」（ヨハネ 21・21〜22）

転職して十年ほど経った後、異動となりました。異動先の職場は、うわさで聞いていた通り、とても忙しい職場でした。私にとって、まさに「激務」という言葉がふさわしい業務量の部署です。業務に関する知識も十分でないまま、何の装備もなしに、激流の中に放り投げられたようなものでした。深夜残業が続きながらも、必死に仕事に取り組みました。それまでは、仕事が困難な時も、祈りながらなんとか乗り越えてきましたが、その時は違いました。ある瞬間から、体が硬直して、デスクのパソコンを前にしても、キーボードを打てなくなってしまったのです。頭が常にのぼせたような状態になってしまう、涙がでてきてしまう等、不安やプレッシャーから、体に不調がでたのです。メンタル面でも頭が混乱し、平常ではありませんでした。深夜残業で帰宅できずに泊まったビジネスホテルで、死にたいという思いにも駆られました。しかし、「主の創造のみわざに反することはできない」という思いと、家族のことを思ったときに、なんとか歯止めをかけることができました。主が守ってくださっていました。ぎりぎりまで踏ん張っていましたが、ついに白旗を挙げる時が来たのです。主の導きでした。病院での診断は、鬱を伴う自律神経失調症で、職場の上司とも相談し、休職することとなりました。休職に至ったのは、体調を崩すほどの業務に問題があったことは事実です。しかし、この休職期間中、みことばを読みながら、主に思いを寄せて、これまでの状況や自分の思い、行動を振り返る日々を続けると、仕事の問題とは別に、私自身の大本に根ざしている問題に主は光をあててくださいました。そのうちの三つをご紹介します。

(一)感謝することをせず、妬みにとらわれていたこと

仕事をこなしたい、認められたい、自分に能力があることを見せたい。自分より実績を残している人を羨む気持ち、妬む気持ち、他人の歓心や人の栄誉を求める気持ち。仕事をしていた自分の中には、そんな気持ちがいつの間にか広がっていたように思います。いつも満ち足りない自分、喜べない自分がそこにいました。妬みの気持ちが自分を、感謝の気持ちとは真逆の方向に向けていました。主から与えられているものを感謝して受け取ることなしに、喜ぶことはで

きません。喜びの秘訣は、実際に手にしたものではなく、どれだけ感謝できるかどうかにかかっていることを改めて主は教えてくださいました。

(二)過去を恥じ、将来を不安がっていたこと

過去の自分の言動を反省することや、自分の罪を悔い改めることは必要です。しかし、自分の過去の過ちは無条件の愛で主が赦してくださっています。また将来についても主がすべてを備え、約束してくださっています。それなのに私は、主が一方的にくださる愛に信頼することができていませんでした。「自分の頭」、「自分の思考」で自分自身の言動を恥ずかしいと振り返り、また、同じく「頭」で将来を過度に予測しようとし、焦りや不安に陥っていました。幼子のような信仰を持ちなさいと主はおっしゃいます。幼子の頭の中は、過去も将来もなく、今、このときを、疑うことなく生きています。子どものように、今だけを意識すると、今この瞬間、主と私の関係はどういう状態なのかと、主に心を向けるようになりました。聖書のみことばや主のご臨在がこれまで以上に自分にとって意味を持ち、自分と結び付き始めました。主の導きに感謝します。

(三)他人を裁き、また、自分をも裁いていたこと

私は、人や社会に対し、不条理なことや非合理的なことに、いら立つことがしばしばありました。そして「こうあるべきだ」、「こうすべきだ」とつぶやくことも多々ありました。それは提案という形を装っていても、そのことを口にするときの根元にある心持ちは、悪口雑言を吐くときのものとなんら変わらないものが潜んでいることに「ハッ」と気付かされました。自分の中に、「不満」や「嘆き」といった醜いものが隠し味のように染み渡っていることを主は教えてくださいました。さらに、意識しないうちに、相手を裁く物差しで自分自身も裁いていることに気付かされました。人を裁く一方、自分もその裁きの基準をクリアしていないことを恥じ、悲しむことも多々あったわけです。

さばいてはいけません。さばかれないためです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。（マタイ　7・1〜2）

ここまでの三つの例は、次のみことばに集約されていました。

ですから、あなたがたは、すべての悪意、すべてのごまかし、いろいろな偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。あなたがたはすでに、主がいつくしみ深い方であることを味わっているのです。（1ペテロ　2・1〜3）

今、私は職場に復帰しておりますが、決して自分の弱さを克服した者ではありません。以前と同様、愛のない自分の言動を思うと、恥ずかしくなり、自分の至らなさを思い知らされることもたびたびあります。しかし、以前とは違うことがあります。それは、主に赦されている喜びを感じられることです。自分の至らなさを自覚し、未熟であると思わされるとき、「その分、主が十字架の贖いをとおして、私を赦してくださっている量は多いのだ。埋め合わせてくださっている量は多いのだ」と実感できます。このクリスチャンとしての基本中の基本を自分のものとして感じ、喜びを味わうことができるようになりました。

恐れるな。あなたは恥を見ない。恥じるな。あなたははずかしめを受けないから。（イザヤ　54・4）

神の恵みによって、私は今の私になりました。
（1コリント　15・10）

また、主が私のことを喜んでいてくださっていると思う時にも、自分の中に喜びと力が湧いてきます。

あなたの神、主は、あなたのただ中におられる。救いの勇士だ。主は喜びをもってあなたのことを楽しみ、その愛によって安らぎを与える。主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる。
（ゼパニヤ　3・17）

こどもが遊ぶ積み木を見ると思わされます。積み木には、積み上げる順序に自然と制約があります。例えば、円錐の積み木の上に立方体の四角い積み木を乗せることはできません。同じように、仕事や家庭や友人関係といったこの世への関心事を土台としていたときは、その上に、主への信頼、主にある喜びは積み上りませんでした。しかし、主への信頼を、自然な形で土台として据え置くことができれば、その他のことが積み上っていく気がします。次のみことばのとおりでありたいと願っています。

私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。（詩篇　16・8～9）

主に感謝します。

竹原　成典（たけはら　せいすけ）
一九七五年生まれ　サレジオ学院高等学校卒、上智大学経済学部卒　東京都庁勤務
妻・通子（みちこ）、娘・詩歩（しほ）

驚くばかりの恵み

竹原　通子



娘の詩歩ちゃんと

二十歳のときにイエス様に出会い救われてから、早や十八年が経ちました。「わたしの目には、あなたは高価で尊い」（イザヤ　43・4）」、「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない」（ヘブル　13・5）と、いつも語りかけ励ましてくださるイエス様は、本当に素晴らしいお方です。

1　神様と出会うまで

真面目で優しい父と、明るく前向きな母に、愛情深くのびのびと育ててもらい、先生や友だちにも恵まれ、自然豊かな環境の中、とても幸せな子ども時代を過ごしました。年相応に悩むことがあっても深刻になることはなく、目に見える幸せに満足し、真理を求めるとか、神様を求めるとかいったことから遠く離れた者でした。

人の目にはまっすぐに見える道がある。その道

の終わりは死の道である。（箴言　14・12）

私は、この幸せは自分が努力する限り永遠に続くものと漠然と思っていましたが、それは人生の厳しさを知らない幼さゆえでありました。そしてこの幸せは、私が二十歳のある朝、突然崩れ去ることになります。

大学進学のために上京し、一人暮らしをしていた私に、一本の電話が鳴ったのです。それは、実家に住む、当時高校生だった妹からでした。「お父さんが自殺しちゃった」と泣き叫ぶ妹の声に、私の頭の中は文字通り真っ白になりました。その真面目さゆえに悩むことの多い父ではありましたが、まさか自殺してしまうなんて信じられないことでした。実家に帰る電車の中で涙が止まりませんでした。どうしてこんなことになったのだろう、これは夢なのではないか、帰ったら父は命を取り留めていてくれているんじゃないか、これから私はこのことを誰にも言えずに自分一人で抱えて生きていかなければならないのだろうか、人の幸せとはこんなにももろく崩れ去るものなのだろうか、・・・そういったことが、頭のなかをぐるぐる駆け巡りました。途中で雪が降り始め、一層の絶望感と悲しみとに襲われました。しかし、次のみことばを後になって知り、「ああ、あの雪の日が、私の救いの第一歩だったのだ。あの絶望が、本当の希望の始まりだったのだ」と思うようになりました。

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」（イザヤ　1・18）

誰にも言うことができなかったこの悲しみを、当時お付き合いしていた成典さん（現在の夫）にぶつけました。彼は、両親に連れられ幼い頃から日曜学校に通っていたとのことでしたが、私と出会った頃は、教会に通うでもなく、はっきりとした信仰がない状態でしたので、そんな私を慰めることもできず、困り果てていました。

そんな折、成典さんの母である京子姉妹から、みことばの書かれたきれいな花の写真集をいただきました。私は聖書のみことばに不思議と慰められ、みことばには何か私の知らない真理があると思うようになりました。そのとき私が励まされたみことばをいくつか引用します。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。（ヨハネ　14・27）

あなたは私を多くの苦しみと悩みとに、会わせなさいましたが、私を再び生き返らせ、地の深みから、再び私を引き上げてくださいます。（詩篇　71・20）

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。（伝道者　3・1～2）

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。・・主の御告げ。・・天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。（イザヤ　55・8～9）

神様は、三浦綾子さんの自伝『道ありき』を通しても働いてくださいました。この本の中で、彼女が数々の試練に遭いながらも神様を見上げて輝いていらっ

しゃる様子を読み、私も三浦さんのように変わらない喜びと強さが欲しいと心から思わされ、「神様、本当にあなたがいらっしゃるなら、わたしも信じられるようにしてください」と祈るようになりました。エレミヤ書33章3節に「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう」とあります。このみことばのお約束通り、主はわたしの小さな祈りにも答えてくださり、確かに私の理解を超えたことを、ベック兄を通して語ってくださいました。

京子姉妹から誘われ、初めて家庭集会に参加すると、ベック兄は「よく来たね」と優しく迎えてくださり、私にも分かりやすく神様のお話しをしてくださいました。人が作り上げた宗教は何の意味もないこと、この天地万物を作られた神様に個人的に出会うことが大切であること、また救われるために勉強したりいい子になったりする必要はなく、ただ素直に、今まで神を神とせず自分を神として生きてきたことを「ごめんなさい」すればOKということ、そして神様はわたしを永遠の昔からありのままで愛してくださっているということなどを話してくださいました。わたしはとてもうれしくなり、スキップして帰りたいほどでした。

2　罪を認める

こうして神様と出会った私は、永遠に変わらない幸せに目を留める者に、変えられていきました。そして神様からの次のレッスンは、自分が罪人であることを認めることでした。幸せな子ども時代を過ごしたことは本当に感謝なことでしたが、それゆえに世間の厳しさを知らず、たいていのことは努力次第と信じて、与えられたことは真面目に取り組んできたつもりでした。自分は、完璧ではないにしろ、どちらかと言えば「いい人」の部類に入るのではないか、と傲慢にも思っていました。しかしそれは、私の勝手な思

い込みでした。少しずつ聖書を読んでいくにつれ、また集会の兄弟姉妹の証しやメッセージなどを通して、神様の光でわたしの心の奥底が照らされたとき、そこは真っ暗な闇であることが示されました。「いい人」のように装うことはできても、神様の目にはどんな小さな心の動きも明らかです。自分には何もないのに、ある者のように驕りたかぶり、人を裁き、自分を神として生きてきたことに初めて気付かされ、愕然としました。

しかし、すべてのことはイエス様が二千年も前に十字架上で解決してくださっていたのでした。素直に罪を認め、主に感謝するだけで、すべてが赦されているという驚くべき事実を、聖書は教えてくださいました。なんという恵み、なんという解放でしょうか。イエス様は私の罪を負って十字架にかかり、私が受けるべき罰を受けてくださり、地獄に堕ちて当然の私を天に引き上げてくださったのです。

8人の証し

私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。（ローマ　5・6～8）

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

（1ヨハネ　4・9～10）

私のような罪人のために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された神様の愛と、復活されたイエス様が今も生きて働いておられ、いつも私を守り導いてくださっているという素晴らしい事実を知ったとき、状況はまったく変わらないのに喜べることを体験するようになりました。そしてその年の八月に、成典さんと共に、洗礼を受ける恵みに与ることができました。大好きな父の死は、私にとって本当に辛いことでしたが、それくらいのことがない限り、愚かな私は神様に目を向けることがなかったでしょう。

ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。
あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。（イザヤ　38・17）

あなたがたのあった試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント　10・13）

3　父との再会の確信

救われて後、なぜ神様は父を救ってくださらなかったのだろう、と思うことがありました。しかし、ベック兄が母に、「ご主人は天国だよ。主は、『自分はもうだめだ』と思っている人を救わないはずがない。それに、あなたが天国に行って、神様に『ウチの主人はどこにいますか?』と聞いたとき、『地獄だよ』と言われたら、そこはもう天国じゃなくなっちゃうでしょう?」と言ってくださったのを聞いて、父は今、天国にいて、将来また再会できるということを、喜びを持って確信できるようになりました。

4　罪と恵みを交換する日々

主の素晴らしさはいよいよ増し、ただ主の前にひれ伏すのみです。私の性質は相変わらずで、いつも自分のことばかりを考え、主を第一とすることのできない者ですが、気づかせていただいた一つひとつの罪を主に差し出すと、主は平安と喜びをくださいます。私の罪と主の恵みを交換していただけるとは、これ以上の儲け話はないのではないでしょうか。

結婚生活においては、主に頼らずとも自分で夫を愛することができる、と知らず知らずのうちに思い込んでいました。私たち夫婦は、学生時代からとても気が合っていたからです。しかし主はそれを良しとされず、私からほんの短い間、愛情を取られました。

そして私が自分の傲慢に気付き、悔い改めたとき、主は私を以前に増して夫を愛する者にしてくださいました。

また私たちは、卒業後すぐに結婚して学生気分が抜けなかったこと、夫婦二人だけの期間が長かったこと、そして何より私自身の自我の強さのために、イエス様が我が家の「かしら」であることは認めつつも、夫と妻が対等であるかのような錯覚がありました。その頃は自分のことはすっかり棚に上げて、主人の信仰のあり方に対して不満を持つことが何度となくありました。しかし子どもが与えられ、子どもを主のもとに導く責任が与えられたとき、「イエス様、夫、妻、そして子ども」という主の定められた秩序が非常に重要であることを改めて教えていただきました。

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。（エペソ　5・22〜24）

夫に従うことは、決して妻の地位をおとしめるものではなく、かえって妻が大切にされ守られることであることも教えられました。クリスチャンの結婚は、キリストと教会の関係を反映させたものであるとの奥義も知らされ、罪だらけの私たちがそのような栄光ある特権に与れることを思うと、主のみこころのあまりの壮大さに圧倒されるような気持ちです。私には、主に従うことはおろか、夫に従うこともできませんが、そのことを素直に認め、主の秩序を守れるように祈り求めたとき、私たち夫婦の関係はより強く確かなものに変えられてきたように思います。主人の信仰も、さまざまな訓練を通して変えられてきているのを見て、私の傲慢こそが主人の歩みを阻んできたのだということが分かり、また悔い改めさせられました。私たちは三人の小さな家族ですが、こんな取るに足りない家族の中にさえ主がおられて、たとえ私たちが目に見えることに左右され、悩み惑うことがあっても、いつも私たちを守り導き、喜びで満たしてくださることを心から感謝します。

子育てにおいても、自分の愛のなさ、傲慢、思い煩いに、悔い改めの連続です。主は、親になる資格のない者に子どもを預けてくださったのだから、この子のすべてにおいて必ず責任を取ってくださると信じることができます。夫婦そろってイエス様という土台の上に、全能なる神様に祈ることができることは、本当に大きな恵みです。結婚九年目に与えられた娘を通して、たくさんのいわゆる「ママ友」と出会い、主を証しする機会を数多くいただいています。ご近所に住むママ友が、中学生の娘さんとともに、あっという間に救われたことを通しても、主のご栄光を見せていただきました。結婚して最初の数年は、子どもが与えられないことを辛く感じたときもありました。しかし今は「神のなさることは、すべて時にかなって美しい」（伝道者 3・11）ということを実感しています。

神様は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである」（2コリント 12・9）と言ってくださいます。主の十字架のあがないが完全であることに感謝して、家族そろって主の近くを歩ませていただきたいです。そしてこのような弱い私たちを通しても、主がご栄光を豊かに現わしてくださいますようにお祈りしています。

竹原通子（たけはらみちこ）
一九七六年　栃木県生まれ
栃木女子高等学校、上智大学英文科卒
夫・成典（せいすけ）　娘・詩歩（しほ）

主との出会い

中村　友紀



左からお父さまの博昭さん、友紀さん、お母さまの恵子さん

私は、一九九一年に東京都西東京市で五人家族の末っ子として生まれました。家族はクリスチャンではなく、神様について考えたことはありませんでした。そんな中、私がイエス様という存在を知ったのは、中学三年生のときでした。同級生が、クリスチャンであること、イエス様を信じていることを話してくれました。その後、高校一年生になり、その同級生から夏の御代田キャンプに誘われ、同級生の家族と私の母と一緒にキャンプに行くことになりました。

生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。（1コリント　2・14）

主は、私の力であり、ほめ歌である。主は、私の救いとなられた。（詩篇　118・14）

その後も私は変わらぬ日々を過ごしていましたが、それを機に母の中で何かが変わり、母は集会に集うようになりました。そして、そのことは家族にとって大きな変化をもたらしました。

私の家族は、ごく普通の仲の良い家族でした。しかし、私が小学生になってまもなく仲良かった父と母の間で突然会話が消えました。そればかりではなく、母の父に対する態度が冷たくなり、私は大きなショックを受けました。大好きな父と母の間に挟まれるように会話のつなぎ役となる日々はとても苦しく心が砕けそうでした。

イエスは答えて言われた。「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」（ヨハネ　13・7）

そんな状態が何年も続いていました。ずっと続くのだろうと思っていました。そんな中、ある日突然、母が父と普通に会話をしていました。それは、母が集会に集うようになってすぐのことでした。私は本当に驚きました。そのとき私は、母を変えたのはイエス様であることを確信し、私は思わず「イエス様ってすごいね！」と母に言いました。

それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。（マタイ　19・26）

母の中で何が起きたのだろう、私には変えられなかった家族の仲を変えたイエス様はどんなお方だろう。私はイエス様を知りたいと思うようになり、母について集会に行くようになりました。高校二年生になり、今度は自らの思いで夏のキャンプに参加しました。同級生の家族と一緒に車で向かい、仲良い家族の

会話に混ざりながら、私の家族との違いはなんだろうと考えていました。そして出た答えは、家族それぞれがイエス様に信頼していること、みんなが同じ方向を見ているということでした。

イエス様が中心にいる家族は、死んでも天国で会えることをみんなが信じています。私の家族はどうだろう、そもそも死んでも天国でまた会いたいと思うのだろうか、そこから疑問が湧きました。そう考えたときに、ふと大好きな家族に虚しさを感じました。そんなとき、みことばが与えられました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

私は、家族と同じ方向をみたい、そう思う一心で、「イエス様が私の家族の中に入ってください」。「私たちを助けてください」。初めてそう祈りました。すると、心がすっと軽くなり暖かい気持ちになりました。また、母が救われた理由も知ることになりました。それは、母のお腹の中で流産した四番目の子がいたということでした。私は、両親の不仲をすべて周りのせいにしていました、しかし、誰のせいでもない。イエス様の計画だと思うことができました。

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。（エペソ　2・4～5）

「洗礼の恵み」

二〇〇七年九月に盛岡で母と洗礼を受けることになりました。同級生の妹も一緒に受けることになり、私と母は新幹線、同級生の家族は車で盛岡に向

かいました。

行く途中、私は急に不安になりました。イエス様を信じたから洗礼を受けるといっても、本当にこれでいいのかという迷いがまだありました。また、洗礼の意味も正直はっきりわからず、聖書を開いて洗礼の言葉を探してもどこにもなく、洗礼がバプテスマという言葉であることも知りませんでした。誰にも聞くこともできずいるのに、周りからはよかったね、という言葉が飛び交うのでした。

そんな気持ちのまま新幹線で盛岡に向かっていると、電話がなり、同級生の家族の車のタイヤが高速道路でパンクし、単独事故が起きたとのことでした。私は一瞬、頭が真っ白になりましたが、驚くことに、割れた車の窓ガラスは車内ではなく、全部が外に向かい、大きな怪我を誰ひとりすることなく守られたということでした。まさに、イエス様が彼の家族を守ってくださったことを感じました。しかし、車には洗礼に必要な洗礼衣が積んであり、到着の遅れによっては洗礼ができなくなる状況になりました。大変な出来事の中で、洗礼ができなくなるかもしれないということに少しほっとしている私がいました。

盛岡では、洗礼衣を持った彼の家族が到着するまでの一時間以上、お交わりが与えられました。そこで、ある兄弟が、洗礼はイエス様を信じたことを周りの人に証しすることである、と教えてくださいました。また、同時に次のみことばを教えてくださいました。

人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。（ローマ　10・10）

このみことばをいただいて、心から喜んで洗礼を受けることができました。

「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日に

あなたを助けた。」確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。（2コリント　6・2）

そのときから、私はイエス様を自分自身の救い主と受け入れ、共に歩む日々が始まりました。

「主と共に歩む日々」

私は、大学を卒業し、二〇一五年四月から東京都立の特別支援学校で働いています。そのような道を志したきっかけは、高校二年生のときに「天国の特別な子ども」というお話を読んだことです。

『天国の特別な子ども』
会議が開かれました。
地球からはるか遠くで
「また次の赤ちゃん誕生の時間ですよ」
天においでになる神様に向かって
天使たちは言いました。
「この子は特別の赤ちゃんで
沢山の愛情が必要でしょう。
この子の成長はとてもゆっくりに見えるかもしれません。
もしかして一人前になれないかもしれません。
だからこの子は下界で出会う人々に、
特に気をつけてもらわなければならないのです。
もしかしてこの子の思うことは、
なかなかわかってもらえないかもしれません。
なにをやってもうまくいかないかもしれません。
ですから私たちはこの子がどこに生まれるか
注意深く選ばなければならないのです。
この子の生涯が幸せなものとなるように、
どうぞ神様この子のためにすばらしい両親を
探してあげてください。
神様のために特別な任務を
引き受けてくれるような両親を。
その二人はすぐには気がつかないかもしれません。
彼ら二人が自分達に求められている特別な役割を。
けれども天から授けられたこの子によって
ますます強い信仰と豊かな愛を
いだくようになることでしょう。
やがて二人は自分達に与えられた
特別の神の思し召しを悟るようになるでしょう。
神からおくられたこの子を育てることによって。
柔和でおだやかなこのとうとい授かりものこそ
天から授かった特別な子どもなのです」

私は、イエス様のご計画があって、一人ひとりこの世に生を受けていることを知りました。そして、イエス様が大好きな、子どもに関わる仕事に就きたい、イエス様に選ばれた両親にイエス様を伝えたい、そういう思いで大学に進学しました。

大学四年のときに、教員採用試験を受けました。二次試験で不合格となりました。二十二年間の人生で初めての挫折でした。就職先もイエス様が御心の場所に導いてくださると頭では理解していても、先の不安と焦りがあり、イエス様に頼りきれず自分で考えてしまう者であることを見せられました。しかし、イエス様は一次試験を合格という形で道を完全には閉ざされませんでした。一次試験で不合格であったら、教師の道を諦めて他の仕事を考えていたかもしれない私を、イエス様は知っておられました。

私は、翌年も試験を受けることを決め、その間の仕事を与えてくださいと祈るようになりました。けれども、イエス様からの答えはなく、三月の卒業でまわりのみんなは就職が決まっている中、私一人まだ決まっていない状態でした。バンクーバーキャンプには申し込みをしていました。しかし、キャンプに参加する気持ちにもなれませんでした。そんな中、母は私の気

持ちなど関係なしに「イエス様だけだよ」と、それだけを言ってバンクーバーに行きなさいと言いました。私はバンクーバーに行っている間に、就職に関する電話がかかってくるかもしれない、と言い訳ばかり考え、イエス様と向き合うことを避けていました。

人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは主である。

（箴言　16・9）

自分の信仰の無さ、傲慢さを思い知らされました。バンクーバーに行く当日にみことばを与えられました。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

（イザヤ　41・10）

力強いみことばでした。イエス様がここまで言ってくださっているのに、素直に従えない自分が本当に嫌でした。

無事にバンクーバーに着き、キャンプでお交わりが与えられました。そこでいただいたみことばがまさに私の状態そのものでした。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。（イザヤ　59・1〜2）

その日の夜、私は一人ベッドの中で悔い改めの祈りをしました。罪が知らぬ間に私の中で大きくなって、どこから悔い改めていいかわからないほどでした。祈りながら、イエス様の十字架が自分の中に迫ってきました。私の抱えきれないほどの罪のためにイエス様は十字架にかかってくださったこと、十字架が自分のためであることを目の当たりにし、苦しさと感謝でいっぱいになりました。

次の朝、昨日の祈りだけでは悔い改めきれていないのではないかと不安になりました。しかし、その朝イエス様がくださったみことばは、次のものでした。

わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。

（エレミヤ　31・34）

本当にイエス様の憐れみゆえに私は生かされていることを実感し、感謝してもしきれないほどでした。イエス様が心に入ってきてくださっていました。就職のことも心からイエス様にお委ねすることができました。帰国してすぐに四月からの仕事が与えられました。それはかりではなく、八月にある姉妹が働いている職場への異動が与えられました。異動のタイミングも完全でした。また、働きながらの採用試験も完全にイエス様にお任せして臨むことができました。面接の前に母からもらったみことばカードを見ました。そこには、こう書かれていました。

彼らをその望む港に導かれた。（詩篇　107・30）

どんな結果であれ、イエス様は私に行くべき道をもう備えていてくださる。そう確信し試験に臨むことができました。そして、後に合格をいただくこととなりました。

万軍の主は誓って仰せられた。「必ず、わたしの考えたとおりに事は成り、わたしの計ったとおりに

成就する。」（イザヤ　14・24）

共に祈れる姉妹がいる職場で働き始めてすぐ嬉しいことがありました。担当している子どもがある朝、突然子ども向けの聖書の話の本を家から持ってきました。そこで、その子がクリスチャンであることが分かり、神様の話をすることができました。イエス様が子ども達のことを捉えてくださり、働きかけてくださっていることを見せていただきました。このように日々、イエス様を体験させていただいている私ですが、すぐにイエス様を忘れてしまうダメなものです。子どもがクリスチャンであることがわかった後に、その子の親と廊下でばったり会い、二人で話す機会が与えられました。けれど、日々の生活のことなどたわいもない話をして、別れた後にハッとしました。肝心なイエス様の話をすることをすっかり忘れていたのです。私は肝心なときにイエス様を忘れてしまうものであることを示されました。それでも、日々イエス様が自分の罪に気づかせてくださり、忍耐深く見守ってくださり、許してくださるお方であるから本当に感謝です。

この一年で与えられた試練は、私の思いをはるかに超えて大きな恵みとして私のもとに帰ってきました。主への感謝の気持ちと悔い改めがなければ、私は前に進むことができないということに気づかせていただきました。そして、二〇一五年四月からは、盲学校へ配属になり、新たな分野で一から学び直しの日々ですが、これからどのようなイエス様の計画があるのだろうかと楽しみにしつつ、どこにおいても「主よ、お話ください。しもべは聞いております」というサムエルのような態度で、イエス様に導いていただきながら、これからも祈り頼って歩んでいきたいと思います。

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。（哀歌　3・22〜24）

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。わたしはあなたがたに見つけられる。（エレミヤ　29・11〜14）

中村友紀（なかむらゆき）
一九九一年七月二十七日生　東京都西東京市在住
家族構成：父・中村博昭（ひろあき）、母・恵子（けいこ）、兄・雄祐（ゆうすけ）、姉・友香（ゆか）
白梅学園大学卒業後、川崎市立の小学校で特別支援学級の勤務を経て、二〇一五年より東京都立特別支援学校にて勤務

主は私の右の手をしっかりつかまえられました

今川　三枝子



中央が三枝子さん、夫の務さん、お子さんやお孫さんたちに囲まれて

私は両親と兄二人、姉二人、私と弟の八人家族で育ちました。物心付いた時は戦争中で、毎日空襲があり、真暗闇の中、山へ逃げることもしばしばでした。終戦になって、疎開していた愛知県の蒲郡から東京に出てきました。一面焼野原でした。東京の貧しさはよく覚えています。

両親は戦後の大変な生活の中、子どもたちを伸び伸びと育ててくれました。狭い小さな家で兄弟が多いのに、兄の池田伝一（二〇二二年召天）は、よく友だちを連れて来ました。

友だちの中には、家族全員が戦争で死に、一人ぼっちの子もいました。お米がなくて、私は友だちのお米やさんに米を借りに行かされました。みんな精一杯で生きている時代でした。

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。（イザヤ　63・9）

主イエス様が私に目を留めてくださいましたのは小学校四年生の時でした。家の近くで土曜学校が開かれていて、お姉さんがオルガンを弾いて、歌を教えてくれました。それは、「行きぬ、行きぬ、行きぬ心の重荷は行きぬ」という歌でした。帰り道、心の重荷という言葉が心にあって、私にも心の重荷があるということに初めて気付きました。終戦後の貧困、両親のいさかい、母のぐち、それを聞いている子どもの私。いつも心が重く、重い物が行ってしまったらどんなに楽になるだろうと、その時思いました。

私がイエス様を信じたのは三十四歳の時、子育ての真最中でした。ちょうど連合赤軍浅間山荘事件が発生した頃で、いく日もテレビで報道されていました。銃を発砲している学生の母親が息子に向かって、「早く出てきて」と叫び呼びかけていました。私はテレビを見ながら、このお母さんも我が子が小さかった時は、このようになるなど夢にも思わなかったでしょうに、と思いました。

親は子どもの幸せを望み、できるだけの事をします。一流大学に入った学生たちが、学生運動でこのような事件まで起こしてしまうのか、と思うと・・・。世の中の風潮に知らず知らず押し流されている自分について考えるようになりました。この事件がきっかけで、自分の思いや常識ではない、生きる真理が知りたいと思いました。

この頃、五歳の娘に「ママは、昨日は『いいよ』と言ったのに今日はどうして『だめっ』て言うの」と言われ、自分の感情で子育てをしていることに気づきました。不安でした。

幼子でさえ、何かするとき、その行ないが純粋

なのかどうか、正しいのかどうかを明らかにする。
（箴言　20・11）

娘の陽子が一年生になりお母さん方とも知りあうようになりました。その中で一人、聖書のことを話す方がいました。私は聖書のことをもっと知りたいと思うようになり、近くの教会に行って掲示板を見ると夕拝七時とありました。主人（今川務）に迷惑にならないように、家事をすべて終わらせて行ってみました。しかし、夕拝は開かれなくなっていました。がっかりして帰ろうとした時、牧師さんの奥さまとお会いしました。私と同じようなお年の方でしたので、子育てのこと、聖書をもっと知りたいことなどを話しました。

奥さまは、「聖書を開いて、ローマ書7章15節から8章1節までを声を出して読んで見てください」と言われたので、言われるままに読んでみました。衝撃でした。帰り道自転車を走らせながら、「ほんとうに私はみじめな人間です」のみことばが心にあって、涙があふれました。そのことを義姉（池田康姉、二〇〇二年召天）に話すと、「三枝ちゃん、あなたそんなに聖書のことが知りたいなら吉祥寺キリスト集会に行ってみなさい。今度伝道集会があるから」と勧めてくれました。

その時は何かすごく疲れていたのですが、その日が来たら心が落ち着かず、行くだけ行ってみよう、吉祥寺のデパートに行ってもいいし、と思いながら出かけました。

集会のドアは閉まっていました。入ろうかどうしようかとだいぶ迷いましたが、せっかく来たのだからとドアを開けるとベックさんが立っていらっしゃいました。ご挨拶しましたら握手してくださり、真っ白なテーブルクロスの掛けられた場所に案内してくださいました。（当時は今の旧会堂が新築されたばかりでした）

落ち着かない気持ちで皆様がお集まりになるのをお待ちしていました。姉妹方が二十人くらい、兄弟は三人集まられました。メッセージされる兄弟が中央に座り、その両サイドにベック兄と年配の兄弟が座られました。メッセージは、ローマ人への手紙6章からで、「台所にも主はおられる」というテーマでした。

帰りのバスの中で、あそこには神様がいると思いました。聖書のみことばは、渇いた砂地にこぼす水のように入ってきました。その頃見つけたみことばは私の忘れられないものとなりました。

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」
（ヨハネ　14・6）

私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。
（2コリント　5・16）

これだと思いました。私はとても嬉しく宝物を見つけたようでした。

日曜日は五十人ほどで礼拝していました。主人は、日曜に集会の前まで毎回送ってくれるのです。後で知ったのですが、「俺は家族のためにこれだけしているんだ。そんなもの信じないで、俺を信じろ」と思っていたようです。

それから半年ほどして、ご近所の七ヶ月になる赤ちゃん（幸ちゃん）が亡くなりました。幸ちゃんのママは悲しみに沈んでいました。夕方、息子の達司がおじゃましているので迎えに行くと、洗濯物をたたみながら泣いているのです。なぐさめる言葉もなく私はた

たずんでいました。人の心をいやしてくださるのは神様しかないと思い、ベックさんに話をしたところ、すぐに伺いましょうと言ってくださいました。彼女はすぐには会ってくれませんでしたが、ベック兄は何度か行ってくださいました。初めて会うことになったとき、ベック兄はご自分の証しをなさいました。お嬢さんを赤ちゃんの時亡くされたこと、その赤ちゃんは今はイエス様と共に、一番すばらしいところにいることを話されました。ママは幸ちゃんが天国にいると確信したようでした。三人でお祈りをして悲しみが喜びに変えられました。

この事がきっかけで滝山の家庭集会が始まりました。ご近所のお母さん方が八人ほど集まりました。この後、ご近所のご家族の皆さんが救いに導かれて行きました。

私には、家族との戦いが始まりました。私が救われて、主人は救われていません。当然、霊の一致がなく、水と油のようになっていきました。「外国の神様なんか信じないで俺を信じろ」と言う主人に、「次元が違うのよ」と言い返す私、そんなやりとりが主人を益々怒らせてしまうのです。

両親にもイエス様の話をしました。両親はびっくりして、私たち夫婦の中に問題が起きてそんなものを信じたのか、と問い質されました。まったく違う、と証しをしました。両親は「そんなのお前の考え過ぎだよ。お姉ちゃんたちを見なさい、ちゃんと子どもたちを育てているでしょう。今川さんに悪いじゃないの。近所の人を集めてキリスト教を勧めたなんて、何をやっているのか。信仰なんて人に勧めるものじゃない」と大変でした。家族中にもすぐに知れ、「三枝子はいったい何をしている、今川さんやおじいちゃん、おばあちゃんに勧めるんじゃない」と姉たちも冷ややかでした。大変な騒ぎとなりました。

また、家庭集会にいらっしゃらなくなった方々には、

私の姿を見ると逃げたりなさる方もありました。信じて日が浅い私は、不安と悩みの中で何がなんだかわからず、苦しくてしかたがありませんでした。でも心の中には、イエス様って本物なんだ…、と消すことのできないものがありました。

家庭集会のある日、今日は皆さんが来ませんので、とお電話をしてベックさんにお断りをしました。幼稚園の作品展もあるのでと言いました。作品展を見て帰ってきたら、ベックさんが家の前に立って待っているではありませんか。びっくりして、とにかく家に入って頂きました。落ち着かなくお茶を出して座りました。

しばらく無言でした。私はベックさんに「私がどうして家庭集会をしなければいけないのですか」と少し感情的に言いました。しばらく無言が続きました。「主のためです」とおっしゃいました。それだけでした。

「ベックさん、イエス様を信じる信仰とはどういうことですか」とお聞きすると、「罪の悔い改めです。死なない人はいないでしょう、天国に望みを置くことです。聖書を読むこと、祈ること、証しすることです」と言われました。

私は、悩んでいることをお話ししました。

「三枝子、祈りましょうか」と言われ、ベック兄が祈ってくださいました。お帰りになる時、「三枝子、全部イエス様のせいにすればいいよ」と言ってお帰りになりました。それは全部イエス様にゆだねて行けばいいということだったのでしょう。

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさらない。

（詩篇　55・22）

8人の証し

Unser HERR lebt

この後、主人たちのために夜の七時からの集会が始まりました。それから聖書のみことばが霊の糧になっていきました。

いま飢えている者は幸いです。あなたがたは、やがて飽くことができますから。いま泣いている者は幸いです。あなたがたは、いまに笑うようになりますから。人の子のために、人々があなたがたを憎むとき、また、あなたがたを除名し、はずかしめ、あなたがたの名をあしざまにけなすとき、あなたがたは幸いです。その日には、喜びなさい。おどり上がって喜びなさい。天ではあなたがたの報いは大きいからです。（ルカ　6・21〜23）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

この頃、軽井沢で年四回ほどバイブルキャンプがありました。主人はその時ベック兄と交わり、救われました。私が救われて二年後でした。主は、夫婦で共に祈る者へ、としてくださいました。

二〇一〇年一月三十日、三十八年間兄弟姉妹のお祈りと奉仕に守られ続けられました滝山家庭集会が閉ざされました。主人が認知症を発症したのです。ドクターから聞いた時はショックでした。主人も受け入れられないようでした。二人で泣きながら祈りました。私たちはみことばで支えられました。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。（ヨハネ　14・27）

兄弟姉妹方は、気分転換にと、日帰りで山にハイキングに連れていってくださいました。主にあるご愛を感謝します。

私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。（詩篇　121・1〜3）

二〇一四年十一月三日午前三時十分、主人が天国に召されました。我が家にて長男達司兄弟、妻由紀姉妹、そして私の看守りの中、イエス様が連れに来てくださいました。突然主人の目がパッと輝き、右上の一点をジーッと見ているのです。その瞳は輝いていました。聖書のみことばのとおりでした。

私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。（2テモテ　4・6〜7）

八十三歳で、人生のラストテープを切って、深く深呼吸をして天国へ召されて行きました。

介護の時、家族はよく私を助けてくれました。退院後、いつ召されてもおかしくない状況のある静かな日、私は音楽を聞かせてあげようと思ってCDをかけました。シベリウスのフィンランディアの曲の聖歌でした。それに合わせて夫のベッドの横に座って手を握って賛美しました。涙があふれ泣きました。主人は手を握り返してくれました。

静かに待てわがたまよ　神に会う朝は近し
その時空に雲なく　涙の霧も晴れて

8人の証し

Unser HERR lebt

輝く御かおを仰ぎ　わがたま満ちたるをえん

主人は今、静かにイエス様をお待ちしているのだ、と思いました。このことは私の濃い思い出となり、天国で会えるまで忘れられないでしょう。

まことに、御怒りはつかの間、いのちは恩寵のうちにある。夕暮れには涙が宿っても、朝明けには喜びの叫びがある。（詩篇　30・5）

主人の好きなみことばでした。

両親は、人生の終盤でイエス様の大きな救いにあずかることができました。二十五年前に母（住枝）が召され、その二年後に父が召されました。主イエス様は両親を平安に天国に召してくださいました。父は召される少し前に、「天国に行ってイエス様にお目に掛ったらまず礼拝して、住枝はどこにいますかと聞くよ」と伝一兄と康姉妹に言ったそうです。父は母にも子どもたちにも愛情深い人でした。

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。（1ペテロ　1・8〜9）

これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。（コロサイ　3・14〜15）

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。（1テサロニケ　5・16〜18）

今川三枝子（いまがわみえこ）
一九四一年　群馬県前橋市生まれ
杉並区立第六小　杉並区立阿佐ヶ谷中　富士見ヶ丘高校卒

8人の証し

Unser HERR lebt

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会
東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会　10:00 / 18:30

火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話]　0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15　〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話]　0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33　〒389−0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

集会の出版物

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ



ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。

なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない(上・下巻)



ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

絶えず祈れ(上・下巻)



ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180−0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4−9−11　吉祥寺キリスト集会

モーセの十戒　神の聖なる戒め



ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。

すぐに起こるはずのこと−ヨハネの黙示録(第1〜4巻)



ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1〜3章、第2巻には4〜7章、第3巻には8〜15章、第4巻には16〜終章までが、それぞれ収められています。

光よあれ −私たちは主のもの証しシリーズ(第1〜9集)



いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

※主のご再臨が近づくいま、すべての本を送料のみで配付しています。
※主は生きておられるの最新号につきましては1部100円です。
お気軽にお申し込みください。

主は、生きておられる
Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる　第38号

定価100円（税込み）2015年10月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。

